

◇平出 和(77歳)

終戦前後の頃

戦中・戦後の生活 ●

昭和十八年頃よりポツポツB29が偵察に房総より一、二機、又は編隊を組んでやってくるようになりましたが、十九年になってもまだ大した事もなく、相変わらず週に一回か二回は来ていたように思います。十九年九月には、私の主人が会社からニューギニヤ班として派遣出発しました。実はもう二月頃には行く予定だったのにその頃から軍の飛行機もなくなっていたようです。私達はそんなに切迫してる軍の台所など、分るうはずがなく、まだかなまだかなと落着かない日々でした。主人も会社にはもう席はなくブラブラの毎日でした。その内もう行けないのでは、と諦めかけておりました。遊んでいる内にやっぱり気になったのか、家の床下を掘り私達の入るだけの穴を掘り放しで作って置いてくれました。当時はそんな防空壕なんて笑っておりましたが後で助かりました。その頃あちこちでも防空壕を掘るよう、隣組から強制され掘り出しました。

主人の出発する前頃からだったと思います。物がなくなり、好きだった煙草、酒が配給制になり、スモーカーだった

主人のために配給日には朝から家の者を動員してあちこちと並んで、本当に配給日は大変でした。

甘い物等口にしたこともなかった主人がどこから都合してきたのか小豆少々、カボチャ少々を求めてきて自分で煮てカボチャのささやかな甘味で汁粉が出来たと言ひ、みんなでおしく食べました。その頃からもうみんなが甘味に飢え、トーモロコシの芯が甘く、良くシャブタものでした。

重複しますが十九年九月に急に主人の出発が決り浜松町の駅まで二歳だった次女を抱きしめきつと帰って来ると言っていたもののこれが最後の別れと思ったのか手放しがたかったようです。

出征して行く兵隊さんもみなこんな思いをして行ったものです。それから霞ヶ浦から本当に最後の飛行機にて南方に行きました。目的地まで行けずマニラで待機してたようです。大分過ぎてから当地には砂糖もいっぱいあるしコーヒーも飲める、と満足そうな顔をした写真一枚と手紙が来ました。それも間もなく焼いてしまいました。それから私達母と子供の

四人の生活が浜松町四丁目七番地の長屋で始まりました。

長男は十九年四月神明小に入学。入学式には主人が行ってくれ、子どもへの最後の務めをしてくれました。入学と共に学校から疎開をどうしますか、との問合わせがありました。その時ももう世間は騒がしくなりみな疎開疎開と田舎のある人は引越して行きました。私は田舎はないし疎開も出来ない手放したこともない始めて学校という集団の中に入ってすぐ親元を離れさせることは私もかなり抵抗はありましたが、近所の友達と共に学校にお願い致しました。疎開地の鬼怒川へ面会に一度だけ行きました。真っ赤な麦御飯には涙が出ました。

三月のはじめだったと思いますが、夜だったか昼だったか、夜昼の区別なくその頃は爆弾焼夷弾を落とし火事になっているのです。その時も真っ赤な炎が空を焦し、これは近いようだがどこだろうと言っていたら、麻布十番の通りが掃^{そう}舐^なになったと逃げて来る人がいました。段々近くなったナーと思いました。また前後するかも知れませんが、昼間一、二機の偵察機が来たと思つたら夜になるとサイレン。電気にフロシキを掛け暗くして、警備団の空襲警報の呼声に、今度は近いような予感がして床下の防空壕に入った途端、飛行機の爆音が聞こえ親子四人壕の中で恐がって泣く子どもの声まで手で被い抱き合っていました。その所へまるで飛行機が家の屋根の上を滑ったかのようなザーと不気味な音がして、後でドカンと何発かの爆弾が落される音がして、家の中も電球は

破れるし、台所の方もガラスの破れる音、家が倒れたかと思うほどの衝撃を受け、そつと手を上げて畳に触^ふれて見たら別に床が落ちてるようでもないので、解除になってからまず家が外に出て様子を見ることにして出て見ると、長屋の人々が誰もいないその心細さ。私達だけになっちゃったのでは、と家の中は電球は壊われ、台所のガラス戸は歪み、薄明りの中、ガラスの破片をひとまず片付けてる内に、ガヤガヤと長屋の人々が揃って帰って来て貴女達を置いて誘いもせず行ってしまった事を謝っておりました。この頃の人達はみな人情がありました。

その後表通りにいらした藤田さんって方が、私達のことをもしもこの袋小路で火事でも出たら女子どもだけでは逃場がなくて危いから表通りに来るように、親切に空家を提供して下さったので、表通りに引越して行きました。その頃みな疎開して通日も大きな家が空家になっておりました。藤田さんって方は芝浦で荷役の仕事をしていらした方で、私も雑用で使つて頂き、何かと戦争中戦後まで大変お世話になり、藤田さんのお陰で私達は無事に何とか生きて来られました。感謝しております。その三月の時だと思いますが、落合にいた兄も焼出され、姉と子どもを北海道に疎開させ、私の所に来てくれました。

表通りに越して間もなく、五月の末だったと思います。サイレンが鳴り出し、もうこの時分は馴れっ子になっていて、ホラまた来たぐらいで防空壕に入ったのです。間もなく爆音

すさまじく飛行機が来て、去ったように思った途端、金杉川沿に焼夷弾をバラバラ落としたようで、パチパチバラバラ凄い突風が吹き、焼夷弾の火の粉が前の広い通りを風に煽られカラカラと通り過ぎ、その内火が家にうつり、あちこちから燃え出し、母に次女を背負ってもらい、長女の手を引いて湯上タオルに用水の水をたっぷりとふくませ、子どもの頭から被い、熱いようと泣く子の手を引いて逃げてもらいました。道で拾った大八車に乗るだけ物を乗せ、その上に後で子供まで乗せて隣の小父さんに引いて頂き、母と共に芝浦に行きました。後で母から聞いたのですが、たっぷり水をふくませたタオルが、一分と立たない内に乾いてしまった、とそれほど火力があったのです。

芝浦の一角だけは焼け残り、みんな疎開されて空家になっていました。藤田さんのお陰で、一軒の旅館に泊めて頂き、最初の日から荒れてはいましたものの畳の上で寝かさせて頂きました。銘々に食料や衣料をリュックに詰め逃げて旅館に集合しました。その時、藤田組十六名位だったと思います。それぞれ持参した食料を出し合い協同生活が始まりました。皆さんが大分米等を持って来たので、大分永いこと米飯を頂くことが出来ました。食料も無くなりかけ、前の道路に置いてあった缶の中の焼けた米大豆を拾って来て煮てみたのですが、とても燻り臭く、さすがに空腹でも食べられませんでした。

十六名の藤田組は、焼野原となった家の跡に、早速防空壕

を掘り、何も手伝えない私達は、母と炊事係として仲間に入れて頂き、雨露を忍ばせて頂きました。阿佐ヶ谷の主人の家は焼けず、帰って来るよう、幾度も言っただけでしたが、もし主人でも帰って来た時、家も人も誰もいなくては、と頑張ることにしました。

防空壕の生活は大変良く出来ていて快適でした。炊事をするには表に出て、倒れている水道管を起こすと水は出て来るのです。煉瓦を積み、かまどを作り、薪はその辺の焼け残りの木材を拾って来る。炭は上の土を掘れば綺麗な炭が出て、茶碗等は台所だった所を掘ればいくらでも陶器類は出て、洗い流せば使用出来るのです。しかし、まだ偵察機が、焼けて何もない所に一、二機と飛んで来て、機銃掃射で撃たれて亡くなった人もいたので、飛行機が来るたびに防空壕に入ったり出たり、食事は大変でした。配給制になり、忘れることの出来ないのは配給食品でした。一人いくらと目方で来るらしく、十六名分の配給品は大した物でしたが、米等見たこともなく、一番に大豆が米替りに十六名分茶箱一パイ、それを米替わりに煮たり煎ったりして出すのですが、味は別に無いし豆の味だけ。塩も無いし男の人は可哀想でした。豆もなくなる頃は、みんな十粒ぐらいしか食べないでしかもその豆をたべたら、次は砂糖、これは困りました。砂糖が茶箱一っぱいにかにしていたのでしょうか。次がフスマ、今の人に話した所に分りますまい。でもフスマは煎って食べました。

芝公園に行き、食べられそうな草の葉等を探って来ては、

野菜代わりに食していました。草の中には結構当時おいしく食べました。ニガイ草もありました。それから広島、長崎と初めて原爆が落とされ、悲惨な話を聞かされました。

話は前後しますが、壕を掘って生活しはじめて、みんな埃と汗の体をただ水で流すだけにしていた所へ藤田さんがドラム缶を持って来て風呂を作って下さいました。その時みんな大喜びでドラム缶に水を張り、下から燃して沸かす五右衛門風呂でロクな囲いもないのに平気で入りました。ご近所の人も入りに来ました。空襲の無い時急いで入るのです。

八月十五日、今日陛下のラジオでの玉音があるというのを聞いたのですが、ラジオなどどこにもなく、誰かがどこかで聞いて来て、終戦を知りました。みんなホッとして、今晩からゆっくり寝られる。しかしアメリカ兵が上陸したら、若い女は気をつけなくては危いとか、負けたのだからと騒いでおりました。大したトラブルもなく、むしろ若い女の方から媚を売り生活していくようになりました。終戦の声を聞いてこれも藤田さんのお陰と思ってますが、自分達で家を建てようという話になり、我が家は隣に佐藤さんと二軒長屋を兄と二人で建ててくれました。二寸角の柱に焼トタンを拾い集めバラックが出来ました。

私の所の一郭が一番早くバラックが建ったように思います。月の出ているような夜は、月の光がトタン穴から入り込むような家でしたが、雨漏り一つしませんでした。家の中にはムシロを拾ってか貰ってかして敷き、その上にボロを乗

せ、夜は千切れちぎれの綿をつなぎ合せ、寝起きしてました。何もなく不自由な生活でしたが、隣組が助け合い、たのしいバラック生活でした。終戦と共に長男の一年生が帰って来て、私の前に手をつきただ今帰って参りました、と挨拶したのは驚きました。やっぱり他人の飯は修業の一つと申しますが、本当に良かったと思えました。その年の十二月になると、会社から主人と一緒に帰ったというお友達が見え主人の死が知らされまして、長男はいかなる事かと思う程泣き崩れました。その後は唯々食料集め、一日働き賃金もらい、翌日は買出し、芋かカボチャばかりで、私など交換する品物もないし、米などんでもないこと、馬にやる芋だけ持って行くかいと。それでも家で腹を空かしている子どもがいる。何でも口に入る物はお願いますと頭を下げて求めて、一家の食事の足しに。でも、人間って丈夫なものですネ、子ども達も元気に成長します。

◇藤井 茂 (75歳)

人事を尽くして天命を待つ

戦中・戦後の生活 ●

二・二六事件(昭十一・二・二十六)の翌日雪の東京駅を発つて満洲の戦車隊に入隊。爾来、北支、南支、海南島、広西省、仏印ハノイ、ニューギニアと転戦。太平洋の孤島ウエーキ島で終戦を迎え二十年十月二十日、九年七ヶ月振りて帰国した私にとって戦禍に見舞われた内地は、余りにも悲惨な状態に涙打たれました。

検疫を終えて久里浜に上陸。家路に帰る国電の中で焦土と化した沿線は全く驚きの一言でした。

箆笥町一番地と市兵衛町(旧住友邸、スペイン公使館)西光寺附近、赤坂の氷川神社(旧三井邸)の両方の丘は残っていましたが、私共の居た谷町、箆笥町、今井町等は全く焼野原でした。義兄(谷町三二番地)が急造のバラックを隣に建てて迎えてくれました。屋根はアスベストで畳がないので米俵を開いて敷いてその上に車のシートを敷きました。

義兄の家にドラム缶の風呂、いわゆる五右衛門風呂があり、その窓に六本木の坂(市見坂)から下る都電のライトがまともに写りました。途中家がなく荒涼たるものでした。

戦後まもなく(二十一年一月)迎えた妻と新橋の闇市で鍋や茶碗などを買って世帯を持ちました。

水団や自家製のパンを造って飢えを凌ぎました。今回顧すれば、全く今日の街の姿が夢のようです。「人事を尽くして天命を待つ。」生きる限り精一ぱいの努力が実ったからです。



米英艦載機

東京地区を衝く

(アム七月十六日) 米軍機は東京地区を衝き、超要機四都市爆撃の目的を達した。超要機は東京、神奈川、千葉、埼玉の四都市を指す。超要機は東京地区を衝き、超要機四都市爆撃の目的を達した。超要機は東京、神奈川、千葉、埼玉の四都市を指す。

北日本大空襲の戦果を詳細発表

【アム七月十七日】

北日本大空襲の戦果を詳細発表。【アム七月十七日】 米軍機は北日本を襲撃し、戦果を詳細発表した。襲撃は東京地区を衝き、超要機四都市爆撃の目的を達した。超要機は東京、神奈川、千葉、埼玉の四都市を指す。

第三艦隊は日立を砲撃

【アム七月十八日】

第三艦隊は日立を砲撃。【アム七月十八日】 米海軍第三艦隊は日立を砲撃し、戦果を詳細発表した。砲撃は東京地区を衝き、超要機四都市爆撃の目的を達した。超要機は東京、神奈川、千葉、埼玉の四都市を指す。

三巨頭會議

十七日愈々開始

三巨頭會議十七日愈々開始。【アム七月十七日】 米英日三巨頭會議は十七日愈々開始した。會議は東京地区を衝き、超要機四都市爆撃の目的を達した。超要機は東京、神奈川、千葉、埼玉の四都市を指す。

米第八空軍の出撃近し

【アム七月十六日】

米第八空軍の出撃近し。【アム七月十六日】 米第八空軍の出撃が近づく。出撃は東京地区を衝き、超要機四都市爆撃の目的を達した。超要機は東京、神奈川、千葉、埼玉の四都市を指す。

締切後の三火

東京湾頭砲撃

締切後の三火。東京湾頭砲撃。【アム七月十七日】 米軍機は東京湾頭を砲撃し、戦果を詳細発表した。砲撃は東京地区を衝き、超要機四都市爆撃の目的を達した。超要機は東京、神奈川、千葉、埼玉の四都市を指す。

米英海軍協定

本日本国協定

米英海軍協定。本日本国協定。【アム七月十七日】 米英海軍協定が本日本国協定と承認された。協定は東京地区を衝き、超要機四都市爆撃の目的を達した。超要機は東京、神奈川、千葉、埼玉の四都市を指す。

(提供：堀利晃さん)

◇藤森 ふさ子 (65歳)
戦争はいや

戦中・戦後の生活 ●

東京上空に初めてB25が飛来したのは昭和十八年四月半ばだったと思う。突如空襲警報のサイレンがけたたましく鳴り響いた。私は台湾銀行東京支店に勤務中だった。情報といえば、新聞の号外かラジオだけの頃で、上司が関係方面へ電話しても輻輳していてだめ、出かけていた行員が帰って来て、市ヶ谷の陸軍司令部がやられたそうだと言うと、家が近くの女子行員が泣き出すというように、種々の憶測とデマでただ不安に戦くばかりだった。警報解除後、交通は乱れていないというので、家の遠い女子のみ帰宅を許された。夕方東京から新橋までやたら遠かった。家が無事でホッとした。

疎開も始まったし、各地域ごとに防護団が結成され、町会での防空演習には男手が足りなく、集まるのはほとんど主婦をはじめとして女の人が多く、モンペに割烹着に手拭いを被り、一列に並んでバケツを手送りし、紐を渡した中央の赤いヒラヒラ目掛けて水をかけたり、竹の棒の先に縄とか布を巻きつけたハタキの親分みたいな物に水をひたして塀をこすったりして演習に励んだ。

座布団を二ツ折りにした防空頭巾も出来た。ラジオ、号外等で東南アジア各地で日本有利と報じられ、欲しがりません勝つまではと銃後の守りを固めようと頑張っていた。初期の防空壕も人が一人やっとしゃがめるくらいのこと壺式だった。

学童疎開も始まり、小学生の妹二人も祖母の田舎へ疎開しました。それでもまだ幼ない弟妹がいるので強制疎開の跡地にバスがすっぽり入る位の立派な我が家専用の防空壕を作つて、中には自動車のシートを置いてちょうどマイクロバスに乗つたようだった。私は台銀防護団員だったので証明書を持たされて、カーキ色の上衣とキュロットスカートの裾を絞つたようなのを覆ってゲートルを巻いて、ヘルメットを被つた。

夜昼警報が出る様になってから、昭和二十年三月十日夜九時半頃、いつも二階で表の窓からB29が見え、裏の窓から遠ざかると解除のポーが鳴るのに、その時はいつになく爆音が大きいので窓の外を見たら、浜離宮の方から低空でドンドン

やって来て焼夷弾を落としているではないか。悪魔の大コウモリの大群に見えた。初めはバケツを下げて新橋キネマ、大塚の靴工場の方まで行ったりしたが、我が家の方も危ないので引き返し、専用の防空壕に大事な物を運び入れ、大所帯なので米櫃にお米が沢山入っているのを必死に引きずって二つも押し込めたり、タンスを引きずったり、今考えると恐ろしい力が出たものだ。階下の物ばかりだったので二階の暗がりの中で一品でも持ち出そうとしていたら表で「ふさ子ふさ子逃げろ」と父の声がした。その途端バリバリと焼夷弾をお見舞され慌てて外へ出たら三方火の海、家族の姿が見えない、仕方がないので銀座に通じるガードに入り込んだら、目の前で我が家は元より、立派な防空壕にも火がついて燃えている。風がうなつて火の塊りが転がって来るし、防空頭巾に火の玉が飛んで来て焦げる。足元が熱い、顔も熱い、汐留駅も真赤に燃えている。道端に積んであるドラム缶が次から次にパンパン破裂するし、ガード上の枕木が燃えて落ちて来て頭巾の綿まで焦げる、苦しい。暗い方へ暗い方へ逃げ廻ったけど境い目の木の部分に火がつく。ここで死ぬのはいやだ。涙もすぐ乾く。

どの位の時間が経ったか判らないが、お巡りさんが来て早くつかまれと言われて腰にしがみついて歩いて行くと、何と新橋駅前の建物が何でもなく建っている。今朝の肉屋の方も、鳥森の方も燃えているのに。急にヘナヘナとなった、家族はどうしたろうと思いいながら空き家に入り込み、お水を

ガブガブ飲んだ。空が白む頃あれ程の火の海がやつと下火になり焼跡で水道管がニョキニョキ水を吹き出している。見通しが良くなってどちらを向いても無残、まだチョロチョロ火が見える。急ぎ寒さが身に滲みる。

我が家の方へ戻って見ると、床下を掘った壕の中に大きなカメが崩れて、中に真黒な炭の塊り、あれはお酒の好きな母が内緒で作って酒好きの人に振舞っていたドロクの名残だ。二階にあった仙台ダンスの取手だのがあった。防空壕へ行って見ると入口も何も見事に燃え尽きていた。馬鹿力で押し込んだ米櫃もふたを開けたらクンセイになっていた。夢中で運び出した家財道具、布団等皆燃えてしまった。ほじくっていたら大きなお釜に翌朝の米が仕掛けてあったが、お釜が半分溶けても御飯が炊けていた。お釜を抱えて新橋駅前の方へ行き見知らぬ人とお握りを作って分け合って涙をこぼしながら食べた。ガード下で逃げ廻っている時は、涙が出て、傍から乾いてしまったのに。

泣きながらまた家の方へ戻り、新橋五丁目の交番の所に来たら、白煙が立ち込める中から汚らしいオッサンが来る。ポケツとして見ていたら、近づいて来たのは父だった。ワツと飛びついて「皆は」と聞くとホツとしたような声で「学校に居るよ」と。父が家の方を見て「丸焼けだな」また涙が出て来た。父と歩いていたら何と蛇屋だの神明小の方は燃えていない、家々が寒々と建っている。狐につままれたみたいだ。鞆絵小学校の講堂で黒山の人の中から弟妹、母を見付

け、手を取り合つて無事を喜んだ。

それからが大変だった。浜松町の知人宅に厄介になり、紹介されて知人の前の家を譲り受け、焼け残つた知人宅を回つて、食卓、机等を貰つたり、金杉橋を渡つて新堀も無事だったので所帯道具を買い揃えて最底生活に必要な物が揃つた。

とにかく勤務先へ届けに行こうと歩き出し、御成門から日比谷通りを行くと宮城が焼け落ち、立木がまだいふり、白煙が立ち込める中にチヨロチヨロと赤い火があつた。丸ビルも海上ビルも手形交換所も第一銀行も台湾銀行も立派に、威容を誇つていた。油脂焼夷弾も何のそのだった。腫れぼつたい眼からまた涙しながら、家は丸焼けだが家族が無事だった事と落ち着き先が決まつたと報告、四、五日休暇を貰うことにした。浅草から本所深川方面が全滅して死者が沢山出たとの事、昨日の夕方、「また明日ね」と元気で別れた女子行員が八人も亡くなった由。我が家の方は部分部分の罹災で軽い火傷位で大怪我もなく「君の所は小さい弟妹がいて大家族なのに本当に良かったね」と言われ、不幸中の幸だったと痛感した。

夜またしてもサイレンが鳴る。空襲ずれして、夜のポーのたびに布団、鍋、釜、茶碗等すぐ荷造り出来るようになった。それまでは主に油脂焼夷弾だったのに金杉橋から新堀にかけて爆弾攻撃され、川べりの防空壕に直撃、角の肉屋さん一家が全滅されたとの事、西応寺の知人宅も焼夷弾にやられた。金杉橋にも大きな穴が開いていた。四月半ばのサイレン

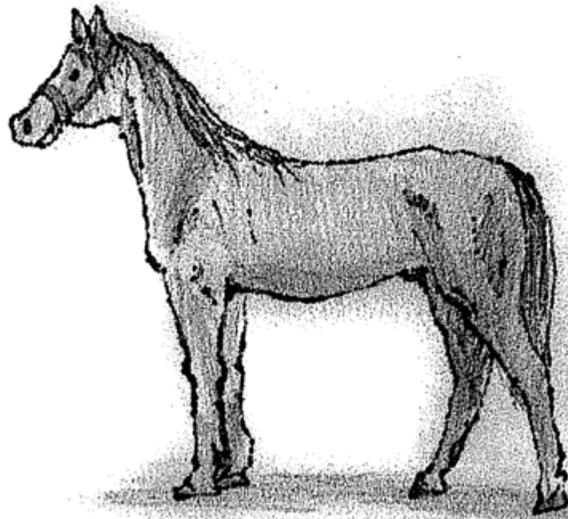
を聞いたあと照明弾が落され、ゆっくりと四方を明るく照している所へ焼夷弾が落ちる落ちる。バケツを下げてすぐに妹と二人で柴田さんの方へ消火に行つたら、お米屋さんの旦那が「水を捨てなさい」と言つてお米を入れてくれた。その傍を消防ポンプの荷車に米の南京袋を山程積んだのを「危ないから除けるッ」と三、四人の防護団の人が駆け抜けて行つた。浜松町全域大門からあの界隈がアツという間に火の海と化した。当然、我が家も燃えてしまった。浜松町のガード下に都バスが何台も置き放しされてあつたので矢張りねぐらの無くなった前の家族と一台のバスに御厄介になり、バケツのお米がおかげさまで二軒分のお腹を満たしてくれた。水だけはむき出しの水道管のおかげで豊富だった。父一人を残して再度田舎へ。

二度も焼け出されて田舎でも呆れていた。食糧を背負えるだけ貰つて帰つて来てから、焼け跡を片づけて妹達と夢中で掘つて父と前の家のおじいちゃんに立派な壕舎を作つてもらつた。畳までちゃんと敷いてあるし、お酒落な建物であつた。地上に建てるもまた空襲されるからだ。アチコチで樋音つちおとが高まつた。眼をつり上げて必死で過ごしていたので、その上勤めがあるし、食事の支度、空襲と。

八月になってから広島、長崎へ原爆を投下され、死ぬ時は潔ぎ良くと覚悟を決めているうちに八月十五日。台銀久我山寮（テニス、バレーコート、野球場等）の半分以上も高射砲陣地にされて残りの一部を家庭菜園にしていたが、ちょうど

当番に当り野菜の世話をしていた。午前中また艦載機が来ていたのでトマトの植込に頭を突込んで待避していたがそのうち静かになった。重大な放送があるということで、兵隊さん達の後に整列してラジオ放送を聞いたが始めて聞く天皇陛下のお声もかすれて聞き取り難かったが、兵隊さんの肩が揺れ始め嗚咽を堪えている様子を見て、日本は遂に負けたと思つて、涙もなく涙が出て来た。放送を聞き終つて隊長が「思い切り泣け、ただし軽はずみな事はするな、我々の指示に従つて行動するように。」言葉が終るや否や、くず折れて泣き声が高まった。

やがて進駐軍が街に溢れた。浜松町のバス、電車の車庫が見事に綺麗になつてPXが出来た。おかげで、浜松町界隈は電燈も着いた。MPが警戒してくれたので割合治安も良かったが、新橋有楽町のガード下に夜の女が増えた。台銀の窓口にも進駐軍がお客として現われ始めたので、急速英会話の講習を受けた。新橋、新宿、アチコチで闇市が賑わつた。あれ程敵対視していた米軍が日本へ来てくれたから今の平和があるのかも知れない。とはいふものの、九月二十八日朝のラジオニュースで台銀が接収されたと聞き、半信半疑で駆けつけたら玄関という玄関、あらゆる出入口にMPが立っていて、私物も持ち出せぬまま、職を失つた。二十歳になつたばかりだった。



◆古澤 房子（57歳）

モンペ姿でむかえた女学校入学式

戦中・戦後の生活 ●

昭和十六年十二月八日、私は千葉県木更津の第二国民学校二年生でした。木更津は海軍飛行場がある関係で町は活気があり、兵隊さんで賑やかでした。四年生位までは、あまり緊迫した気持ちも少なく、子供心にも食糧難が頭に残る程度でした。学校の授業も戦地の兵隊さんに慰問文を書くことが多く、「兵隊さん、お国のために頑張ってください。私も頑張ります」と例文の様に書いておりました。

そのころ兵隊さんを下宿させている家も多く、近くの叔母の家でも四、五人の兵隊さんがいつもおりました。叔母が一生懸命草だんごを作ったりして、御馳走をしておりました。私達三姉妹も、当時はめずらしいキャラメルなどを戴くのが何よりの楽しみでした。兵隊さんから軍歌を教えてもらった、替歌で「さらば木更津よ、又来るまでは」と合唱し、出発の前には叔母の手料理でにぎやかに送りました。その内で残念ながら、Tさん・Sさん・Mさん・と帰らぬ人となり、お兄さんが戦死したような淋しい思いで一杯でした。

二十年に入り戦争も激しくなり、怖かった事も二、三回あ

ります。私が六年・妹が一年生、学校で空襲に会い家に帰る時、母から「いつも妹と一緒に、手をつないでね」といわれてましたので、一年の教室に迎えに行きましたが、妹は帰ったあと私は夢中で近道の田んぼ道を走りました。空にはB29がはつきりと見えます。その時男の人の動いちゃ駄目という大声で私は小さな小屋に、うずくまりました。何分たつたでしょうか、その男の人に何もなくて良かったね、といわれ我にもどりました。そこは普段はさけて通る豚小屋でした。豚が二匹おりました。きつと豚ちゃんもおどろいた事でしょう。母が外で私の帰るのを待っていて、だきついて泣きまじう。母が外で私の帰るのを待っていて、だきついて泣きまじう。母が外で私の帰るのを待っていて、だきついて泣きまじう。母が外で私の帰るのを待っていて、だきついて泣きまじう。母が外で私の帰るのを待っていて、だきついて泣きまじう。

八月十五日、防空壕の前で父母・隣組の人達と直立不動でラジオから流れる天皇陛下のお言葉を聞きました。私が父の涙を見たのはこの時が初めてです。大変な事になった、これからどうなるのかと、不安な気持ちで一杯でした。まもなく木

更津基地にも米兵が駐屯し、町を米兵が、ガムをかみ口笛を吹きながら歩きます。女、子供は外に出てはいけないといわれ、米兵が来ると家の中に、かくれました。

半年ほどたった夜中「姉さん帰ったよ」と母方の叔父の声、復員に喜びました。私の祖父母、姉妹達の感激と、あの夜の事も胸につまります。そして私は旧木更津女学校入学、入学式はモンペ姿でした。

二十一年の秋、学校に一人の男性が私を訪ねて見えました。(その方には、私が小学生低学年の頃、学校から慰問文と、母が妹にお乳を飲ませている絵を書き送りました。)偶然木更津出身の方の許に届き喜んでいただき大事に持って帰られました。絵の裏に私は自分の住所、そして商売の事などを、記入してあり解ったそうです。その日は、先生にも喜んでいただき早退してその方の家に招待され、大変なもてなしを受けました。私は少しはお役に立ったのかしら、と乙女心も感傷的になりました。

麻布に住んで二十余年、亡き姑は焼け出されて有栖川公園に逃げた事など、昔の写真が無いのが何より残念とよく聞かされました。私は今五十七歳、主人六十七歳、主人は八月六日広島で軍務に従事し原爆に会い、二年前にやっと原爆手帳を手に入れることが出来ました。

戦争をしらない若い人達、孫達にとって八月は一年で一番楽しい夏休みでスケジュール一杯です。忘れられているかに思える戦争、私達夫婦にとっては一生戦争は終りません。八

月に入ると心は乱れ、何か落着かない月となります。私は自分の体験を無にすることなく、初めてペンを取りました。身体に気をつけて、主人と一日も多く、穏やかな日を過し、平和を祈るのみです。



(港区教育史資料)

◆堀 利晃（62歳）

戦時中の勤労働員と日常生活

戦中・戦後の生活 ●

私は、戦前から、三田小山町に住んでいます。戦時中、父は、海軍の軍属として南方へ、私と弟・母・祖母と四人で、家を守っていました。弟と妹は、学童疎開で、塩原温泉へ行っていました。

昭和十九年四月、某大学予科へ入学しました。授業と軍事教練の日々で、六月には、埼玉県の農家へ、麦刈と養蚕の手伝いに動員されました。九月に入り、学生に対する「通年勤労働員令」が下りました。動員先は、月島の「石川島造船所」です。寮は、洲崎にある徴用した遊郭で、工場まで三〇分はかかります。

初めて見る造船所、起重機が、四方に動き、また、いくつかのドックには、建造中の船体が、横たわり、規模の大きさと、働く人の躍動力に、驚かされました。当時の工場長の話によると、動員学生の使命、一緒に働く工員、徴用工、朝鮮人徴用工、数多い囚人達と、国家の為、一丸となって、海国日本の造船に、力を入れてもらいたいと、若い私達は、血、肉は踊りました。

十九年十二月に入り、洲崎の寮を、引き上げる事になりました。これは、他の学生とのトラブルが多発した事と、すでに、B 29がかなり飛来し、危険があると判断、通勤となりました。私の現場は、鉄板に船型を置き、線引きと、鉦打ちの印をする仕事でした。当時、ストックの鉄板は、山となし一ヶ月に、一隻の割で、進水があり、造船の喜びを、味わっていました。十一月の末頃より、B 29の夜間空襲が毎日のように続きました。日中は勤労、夜は、空襲の恐怖で、心身の疲労は、大変なものでした。

或る夜、空襲警報で、防空壕に待避していると、爆音と高射砲の音が、一段と大きくなり、続いて、焼夷弾の落下の音、急いで外に出ると、飯倉の「水交社」付近と、三河台、六本木方面に、火の手が上り、頭上には、照明弾が光っています。火災は広がり、北風にあおられて、火の粉が飛んできますが、「火ばたき」で叩き消す有様でした。工場では、学生用の防空壕がないため、会社に交渉して、各職場ごとに、作る許可を得、仕事の合間を見て、海岸近くに二十人程入れ

る壕を完成させました。十九年十二月八日開戦三年目の記念日、乾燥バナナ百匁と三十銭の配給がありました。十四日祖母が、心臓発作にて死亡しました。明治生まれで、初めて体験する恐怖と不安の、毎日が心労となって、あらわれたと思います。お寺（小石川）、親類、近所の人、葬儀屋と、走り廻って連絡しました。翌日は、警戒警報中の葬儀、火葬場と、悲しんでいられない慌ただしさ、物のない時代の哀れな葬式でした。

「年末近くB29の来襲も、頻繁になって来た。造船所も一つの目標だと思いが、まだ爆撃はされない。或る日、五機ほどの編隊が来襲、空中戦で、一機撃墜し、東京湾へ落下、黒煙天に上るを見る、味方機二機も落ちてゆく、実に残念、又敵か、味方か落下傘が二つ東京湾に没した。」（当時のメモから）

昭和二十年の元旦、朝から空襲警報、私達近所の仲間は、まだのんきなもので、外では「羽根つき」をしたり、芝園館へ「雷撃隊出撃」の映画見物、夜は、「麻雀」などで遊んでいました。

工場は、昨年来の在庫の鉄板が、底をついて来て、鉄板から山型のさび取り、穴あけに変わり、新造船も、材料不足で、はかどらず、一部のドックには、海防艦が、修理で入っており、人手不足で、ついに中学生も動員されて、私達と一緒に働くようになりました。船体の鋳打ちは、囚人が多く、ふなれのため、ドックへ落ちて、死亡する人も出、仕事の辛さか

ら、脱走する囚人もいました。その時は、大変で学生も動員して、さがすありさまでした。

ある日、みかんの配給をしている時、空襲警報が鳴り、防空壕へ待避しました。三機編隊で上空に来て、帰りがけか、爆弾を一発落としました。落ちた所は船体とドックの間で、大きな穴をあけ、鉄板が飛び散っていました。

銀座、有楽町が空襲された時、防空壕の入口で見えていたが、黒煙もうもうと、空を覆い、爆弾の炸裂する音は、地鳴りとなって、響き渡ってきました。帰り道、昭和通りから先は通れず、あちこちからの火の手、惨状は、目を覆うばかりでした。裏道を通り、新橋から虎の門へ出て、都電で帰りました。少ない人数、材料で、造船も遅々として進まず、海軍側、会社側と苦悩が続き、働く私達も身にしみてきました。戦意向上のためか、日本ニュースが撮影に来て、「勤労と学生」を作成、一般公開されました。その年は五十年ぶりの寒さで、一月、二月と過ぎていきました。

ついに、三月十日の大空襲によって、工場は、焼け落ち全滅してしまいました。

当時、洲崎の寮に入っていた学生、及び徴用工の人々は、ほとんど全滅したとの事で、私達は、通勤になっていたので、助かりました。動員学生も、全部引き上げて、四月から四ヶ所に分散して、動員を続けました。

◆松永 久子（70歳）

機銃掃射、終戦、そして焼野原での生活

戦中・戦後の生活 ●

今七十歳前後の人は男女にかかわらず青春などの言葉すらなかったでしょう。都会の人は食料の買い出しに、男は甲種乙種長い戦争に狩り出され、戦死の悲劇が多くあったでしょう。女子は皆モンペ姿で手拭いをかぶっていました。

長男、長女、妹二人、母が弱くて十一年患って昭和十五年に亡くなり、兄嫁が入りました。長女の私は養女でしたので、東京の伯父の元に返されましたが、義妹が重病の目を患っているため、歳取った喘息持ちの養父が真黒になって働いている様子を耐え切れず、伯父のもとで大事にされて、かえってこれが苦しさに、養家にもどり赤坂の三歳になる子の守りをしました。夕方には芸者さんの着物の着つけの手伝いをし、深夜には待合や料理屋に約束で出ている芸者さんの後口のお通しという事をしてまわります。もう戦争末期も近いのを軍の上官か戦争成金の客でしょうか、山王通りの次の細い道路には黒い立派な車でいっぱいでした。なんとなく軍の機密費が流れるとのうわさを知りました。

五人芸者さんの身受けが決まったので、家を売り、他に移

るので田舎にお帰りといわれました。御礼を申し上げますと、おかみさんは、貴女も良かったが、私も良かったんだよといいました。健康保険の制度のない頃で、義妹の目の医師がよくここまで金がかけてくれた、面倒も見られたねといってくれました。それからは伯父の家には行けず、養家に帰り義兄の働いている東京計器のまかない部に入りました。東京の焼煙、同横浜の焼煙のものすごさは今でも言葉には言い表わせません。いよいよ、ラジオがけたたましくサイレンをならし、相模湾上空という前には機銃掃射のバリバリバリバリがはじまりました。

私たち三人はかまどの火を消し一人は使わないかまどに首をつつ込み一人はかまどのそばに山のように積み上げてあるたき木の中にもぐり込みました。私は宿直の押入れの中のふとんをかぶり、この羽目板を貫通したらおしまいと、ふとんにかじりついてふるえながら音の遠のくのを待ちました。こんな事が度々繰り返されてとうとう工場の大きな煙突に爆弾が落とされました。これまたものすごい地響きとごう音でし

た。

その内だんだんと空襲も間近くなって、工場の広場で玉音放送を聞きました。皆は声一つ出せず首をたれたままでした。

焼野原の東京にいき、伯父^{おじ}は日赤の医師ですから祖母を入院させておりました。バラックの台所で、祖母の食べ物をお手伝さんと持って行き、病院に寝かせてもらいました。そのころはどンドン復員して帰る傷病兵も入院をしています。そのせいか南京虫がふえてかゆくてたまりませんでした。

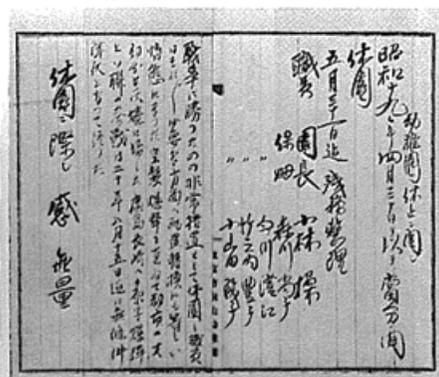
焼け残った家の人達も大勢の人を泊めておりました。お手伝いさんと二人、見まわせば焼野原の闇^{くろ}の夜にドラムカンの風呂、女二人急いで洗い急ぎ着ました。買い出しもリュック六貫目はたつぷりとサツマ、ジャガイモなど何回も遠くから運び大変疲れました。お米、麺類は、伯父のお陰で患者さんが持つて来てくれましたが、いものつる、かぼちゃのつるも食べました。いずれも焼け跡に作ったものです。農林一号というさつまいもを植えました。大きいものがとれましたが、味が悪かったのを思い出します。

同封の絵と歌は、即興で中野学校の高官とおぼえておりますが、芸者さんに渡したものを私にポイントとくれたものです。

これが四十七、八年タンスの中に入れてありました。

今は七十歳になりました。大病になり、日赤中央病院で二回も大手術を受けましたが、五十歳後半で身体障害者とな

り、四人の孫の成長を楽しみにしております。



(港区教育史資料)

◇丸尾 穂積（67歳）

乃木坂界限・戦前・戦後

戦中・戦後の生活 ●

昭和二十年三月十日の大空襲は茨城県谷田部航空隊飛行場からも東京方面の空、朱色に染まり火の玉飛ぶ壮絶な光景であった。

翌朝特別上陸許可をとり新橋駅ホームから虎の門、山王下と進むにつれ唯、灰燼とくすぶる余煙の中に山王ホテル、日大三中、そして遥かに中之町小（現檜町小）のみが望見出来た惨状であった。

家も無く親父、お袋、妹を気遣い新町五丁目、檜町と走り回るも全て灰一色、やつのことで中之町小講堂に真黒な三人を探し出し窮状を知った。

そして五月、連日連夜の猛爆は三月以上に物凄く超低空で飛ぶ我が物顔の戦闘機銃撃に追われ火の粉をかいくぐり、乃木坂を昇り鉄砲山を越え青山墓地にやつの事で辿り着いたとのことである。

昭和十八年十二月、乃木神社社頭からの学徒出陣は『勝つて来ると勇ましく』と日の丸と軍艦旗の小旗の波に送られ新町五丁目銭湯前記念撮影後、山王下から田村町、新橋と乗

った市電窓外夢と消え、唯、国会議事堂のみが中天に残照を受けた姿が印象的であった。

あれから四十五年、年号も平成に改まり、乃木坂界限を散策すると、ビル林立、街は物と車が溢れ六本木若者天国の向こうに東京タワーを眺める時、今は亡き何百万の多くの犠牲者あつての現代日本であることを改めて思い知らされ、思わず来るべき二十一世紀よ安らかなれと心に祈った次第である。合掌。

サイパンのニュース

第六區は標準型！

舊キャンパスは之に倣へ

建設部の第六區を建設するに... 第六區の建設は、標準型として...

景小ソヤキ

建設部は、景小ソヤキの建設... 景小ソヤキの建設は、標準型として...

學園だより

六月十五日、建設部は、學園... 學園の建設は、標準型として...

一、二區移轉

八月、二區移轉... 建設部は、八月に二區を移轉...

手藝工場荒し

建設部は、手藝工場を荒し... 手藝工場の建設は、標準型として...

集會だより

八月五日午後五時より、集會... 集會は、標準型として...

不正事件か

七月九日早朝、不正事件か... 不正事件は、標準型として...

戦球野

七月一日(日)の戦球野... 戦球野の建設は、標準型として...

運動場新設計書

建設部は、運動場の新設計書... 運動場の設計は、標準型として...

裁判だより

六月二十三日の裁判だより... 裁判の建設は、標準型として...

出生死亡統計

出生死亡統計... 出生死亡の統計は、標準型として...

朝鮮人の部

朝鮮人の部... 朝鮮人の部は、標準型として...

(提供：堀利見さん)

◇義煎 貞子（72歳） 暗かった夜からの解放

戦中・戦後の生活 ●

昭和十六年十二月八日、開戦の報が、ラジオから飛込んでまいりました。

当時夫は、横須賀海軍工廠造船部に勤務、私達は結婚三ヶ月目の時でした。あまりの驚きに、どうなることかと、不安でいっぱいでした。でも軍艦マーチにのって、連戦連勝が報じられ、いくぶん落ち付きをとりもどしていた折、東京上空に、米機飛来の報、皆あわてて準備にかかりました。まずは身じたく、私は郷里が静岡で、もんべは見えたこともなく、東北出身の隣の奥さんに教わりました。それから毎日防空訓練で、バケツリレー、火の粉たたきと、駆廻りました。

吉倉町は山を切開いた地型なので、我家の前の道をへだてたところが、がけになっており、二つの隣組で共同の防空壕を作り、はげしさを増す空襲警報に何回となく出入りしました。手不足のため、手伝ってほしいとのことで、吉倉町内会事務所へ入りました。所長さん、海軍士官の奥さん二人、私と計四人で、隣組長宅（それぞれ三十段昇った場所）への配給券の配布、回覧板の届け、数多くの事務処理にと多忙をき

わめました。

家の横が空地になっておりましたので、茄子、胡瓜、南瓜、いんげんなど、とてもよく実り、近所へお分けする程でした。家主さんが、山の上の空地へも作るよう、提供してくださり、夫と共に耕してきましたところ、終戦になりませんでした。このように朝から夜まで、ひたはしりに、走り続けられたのは何だったのでしょう。疲れも覚え、体調もくずさず、若さの特権を、しみじみと思っております。

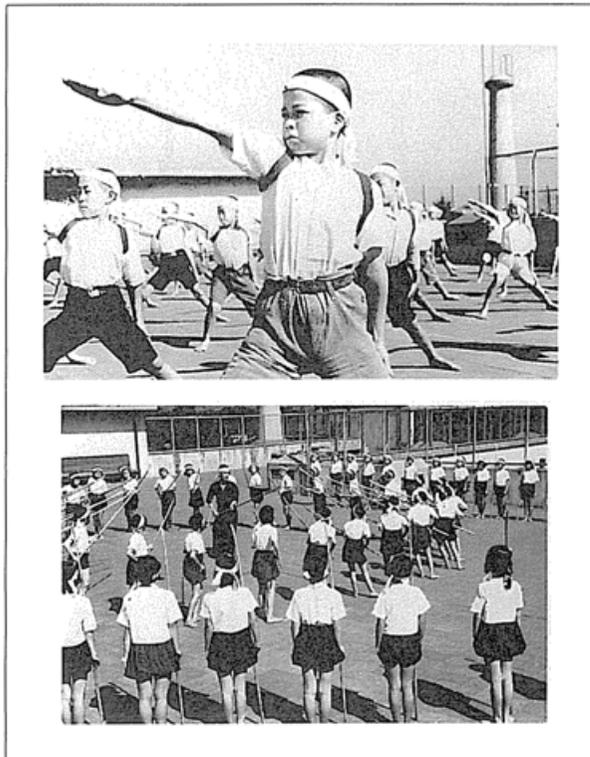
当時横須賀は、軍港としてのおきてが厳しく、高い塀で囲まれ、随分上の方に造船の作業に使用する鉄骨と、クレーンが望めるばかり、カメラ持参も禁止されていきました。

二十年八月十五日、重大発表があるので、組長さんのお宅へ集まり、皆、かたずをのんで、聞き入りました、はじめてうかがう陛下のお言葉に、思いもかけない終戦……皆、声もなく、肩を落としてしまいました。しばらくしてから誰ともなく、今晚から、電燈圏はしなくてもよいとの一声がでて、暗かった夜からの解放感にひたりました。

横須賀に米軍が上陸するので、女、子供は、故郷へ移るよ
うに、との通報があり、又身の危険を思って、逃げることに
なるのです。当然のことながら、海軍工廠は閉鎖され、吉倉
町は災害にあいませんでしたので、荷物をまとめて、夫の郷
里、栃木県烏山町からすやまに移り、夫は農業の手伝い、私は近所の
娘さん五人に和裁を教えておりましたが、将来の見込みがた
ちませんので、翌年四月上京して、以来、港区で四十年も、
お世話を頂いております。

戦争で尊い、若い命をなくされた皆様の、ご冥福を心から
お祈り申し上げます。

世界平和が、いつまでも、いつまでも、悠久に、続きます
よう、祈念いたしております。



(港区教育史資料)

◇吉川 慶子（49歳）

四歳の時の戦争、戦後―初めてのチーズの味

戦中・戦後の生活 ●

それは今でいう私が満年齢四歳の頃はなしですから記憶がはつきりせず、前後のつじつまの合わないことがあるかも知れませんが、はなしのなかみはすべて体験したことですからほんとうのはなしです。

私の父は私が母のお腹に入ると同時に出征しました。はじめ内地配属となり、その後南方のジャワ、スマトラ、ボルネオと転々とし、かえるはもちろん、食べられるものはすべて食べて戦ったと、後に話しておりました。母は私を出産後、私達の住んでいる小山町と目と鼻の先の郵政省簡易保険局の医務課で看護婦をしておりました。ですから仕事があるからということでは私達家族、母と私と祖母は、東京が毎夜空襲を受け、近所の方々が次々と疎開するようになってもお、家と職場を守るのだということで小山町で頑張っておりまして。でもそんな私達がいよ／＼疎開をしなくてはと、親せきでもない遠い／＼関係の知人をたよって疎開を決心する頃には、四歳の私も戦争のいやな体験をいくつも／＼するようになっていました。

空襲警報が発令し、敵機が来襲したということで、どこの家もカーテンや雨戸をしめ、夜だということにあかりも消し、身をひそめて敵機が去るのを待たねばならないときに、四歳の私は何を思い出したのか母に、ハモニカを探してくれ、そしてふきたいとタダをこね、やむなく母があかりをつけたところで、巡視のおまわりさんに母がとくとしかられ、私がおまわりさんに、なんでハモニカをふいてはいけないのかと、くっつかかったことが昨日のことのように思い出されます。

やがて、今は高速道路となっている古川のまわりは強制疎開となり、その空地に防空壕が作られました。私は防空壕に入るのがいやで／＼たまりませんでした。だってかぞえきれないほどのこおろぎが、顔といい、背中といいピョン／＼とびついてくるのですからたまりません。我家で一番金めの衣装をあつめ、つめこんだ桐のタンス前に二帖ほどしかかない防空壕の中で空襲のたびに私はふるえていました。それでも麻布十番と東麻布が燃えるときには、まっ赤にそまったあまりの空の美しさと、鉄塔の火柱をふいてやけ落ちるものすご

さに圧倒され、防空壕の外で啞然^{あぜん}とながめていたものです。また、近所のお母さん達で防火訓練があるのですが、バケツリレーをしたり、かわらにおちた爆弾をトビでおっ欠いて消したりするのです。面白いことをやるなあとながめていたものです。

親せきをたよって近所に和子ちゃんが引越してきました。下町で爆撃にあい、防火用水のかけにかくれたそうですが大やけどをして、顔までケロイドになり、私と同じ年ぐらいでしたが、かわいそうでしたかたがありませんでした。今どこに住んでいるのでしょうか。終戦後にどこかへ引越していきました。そのうちに近所の遊び友達是一人去り二人去り、塩原へ学童疎開にゆくようになりました。

私が、祖母と二人、群馬県へ疎開をした翌々日、大人達が井戸端に集まりラジオを囲みました。この時が終戦の玉音放送でした。それから半年、東京にもどるのはとても大変でした。汽車がなく、年よりと子供ということで、私と祖母は窓からおしこめられ、満員すずなり列車でやっと東京へもどりました。戦後、母は私達の食糧調達のために桐のタンスに入った晴着をもってよく小田原まで買い出しにいったものです。いい着物を渡したのにろくな食糧がもらえなかったとなげいていました。

さつまいもや、ジャガイモの配給に私達子供も三田高校の体育館に行列を作ってもらいにいったものです。タバコも配給でした。行列を作ってもらったきざみタバコを、戦場から

帰った父がタバコ巻き機で上手に巻きタバコにしておいしうにすっていました。

私は駐留軍のクラブになった三井クラブや麻布十番でアメリカの兵隊さんがすてたチョコレートやキャンデーのみたこともないようなきれいな紙を上手にのばして、私の宝物の箱にしまつて大切にしました。

そのうち、今でいう専売病院の反対側の川のふちにあるプールに、近所の子供達がみんな泳ぎにいくようになりました。露天プールですがいつも小さなカップ達であふれていました。このプールは、戦争でやけた飯倉小学校の焼けのこつたプールだったそうです。

私の父は南方から昭和二十二年に着のみのまま、マラリヤという熱病にかかって復員しました。すぐそのまま病院に入院しました。骨と皮のようにやせていました。

物ごころついて初めて父に対面した私は、はずかしいやらうれしいやらいとも複雑な気持ちでした。

大人達はどの〇〇さんは隠とく物資を山程もってかえってきたから運がいいとか、どこの△△さんは着のみ着のまままだから損したとかはなしていました。

初めて口にしたチーズの味ははきだしたいような味でした。

幼い頃の私の戦争の体験は、二度と戦争はいやだ、起こしてはいけない、という強い信念を持ち生きることでした。

◆渡部 和雄 (60歳) 恐怖の脱出行

戦中・戦後の生活 ●

昭和二十年八月二十日、城津公立中学校（朝鮮・咸鏡北道）に全校生徒が登校し、ワラ半紙に謄写版刷りした粗末な在学証明書を渡されて、学校は休校になった。

戦時中は一度も見たことがなかった米軍の飛行機が飛来するようになった。二十三日、日本軍の駐屯部隊が壘二枚ほどもある白旗を先頭に、丸腰の兵隊、武器を満載したトラックを従えてソ連軍に投降した。既に警察もなく、市民はこの隊列を見て不安があった。その夜見上げるような大型戦車が太い砲身を突き出し、陸続と地響きを立てて市内に入ってきた。自宅のカーテンの隙間からのぞくと、戦車の強烈なヘッドライトに照らし出されたソ連兵の顔は、どれも薄汚なく鬼のようで怖くて身の毛がよだつた。果たして翌日からソ連兵と朝鮮人による暴行・略奪が始まり、我が家も三回強盗に入られた。一度は夜中にソ連兵が勝手口を壊して侵入してきた。あわてて明りを消し家族六人が便所に逃げ込み、息を殺していたら実弾を数発乱射して出て行った。この時は全く生き心地がしなかった。

北朝鮮も八月は暑い。一日中家に閉じこもっていると息が詰まりそうになるので、海に行つて見て驚いた。ブクブクに腐乱した死体がいくつもいくつも浮いている。死体は不思議に男はうつ伏せ、女は仰向けに浮かんでいた。市内のあちこちで「ソ連兵に抵抗した日本人が殺された」という話は、嘘ではなかったのだ。

物騒な日が続いていたが、九月に入って引揚列車が出るといので、リュック一つで椅子のない客車で編成された列車に乗り込んだ。朝鮮は北緯三十八度線で南北に分断された。ちょうど三十八度線を流れている東豆川が国境となり、この川をはさんで北が全谷、南が東豆川駅で鉄橋で結ばれている。しかし引揚列車といってもこの鉄橋を渡る保証はなく、まことに心細い列車である。行ける所まで行つて、あとは徒歩で国境を越えるしかない。国境にはソ連軍が配置されていて、越境者を見つけ次第射殺しているという。どうしたら無事に越境できるか策もなく、国境が近づいても不安はつのるばかりであった。列車は律儀に各駅に停まりながら何とか国

境の全谷駅にたどり着いた。この間何度ソ連兵に脅迫されたことだろう。そのたびにマンドリンと称する自動連発銃を胸元に突きつけ、いざという時の用心に隠し持っていた時計や貴金屬を没収した。兵隊は囚人兵が多く、女や少年兵もいる、こんな奴等にと癪にさわるが我慢しないと命がない。若者が動員され、ホームの清掃をさせられて列車はもと来た線路を戻り始めた。国境がだんだん遠ざかって行く。いくつ目かの山狭の小駅・大光里に着いた。母（父は応召）が突然「下車しよう」と言う。見るとソ連兵の姿が見えない。班長の制止を振り切って、回りにいた四家族ほどと一緒にホームにとび降りた。列車はすぐに発車した。朝鮮人の駅員にソ連兵がいなか確かめると、ここには来ていないと言う。早速駅舎の陰にかくれて山越え用に身支度し、駅員に金を握らせて道案内を頼んだ。越境者はもちろん、道案内も同罪で発見されると即座に銃殺される。駅員は拒んだ。金を足して拝み倒し、やっと別の道案内を探してもらった。この間もソ連兵が現れないかとヒヤヒヤしながら見張り続けた。昼は山の中に潜み、夜は案内人を先頭に暗いケモノ道のようなけわしい山坂をはい進んだ。婦女子が大半の一行が、初めて履いたワラジで足を血に染めながら、前の人を見失わないようにひたすら後を追った。「もう駄目だ、私に構わず行って下さい」と言う者が始めた。山中に置き去りにするわけにもいかず、道案内からは急きたてられ、グズグズしているとソ連兵が追いかけてきそう、頬を張っては気合を入れ、木陰に引

き込んで小休止してはまた歩き出した。部落の近くは二、三人ずつ間隔を置いて抜き足、差し足で通るのだが、飼犬にほえられて駆け出したり、追いはぎにはわずかに残っていた衣類を取られ、ソ連軍に密告するぞと脅迫されては金を巻き上げられた。何度もう駄目かと観念しかけたが、その都度励まし助け合って危機を乗り越えた。四日目の未明、ようやく国境の川、東豆川の見える所までたどり着いた。付近にソ連兵がいなことを願いながら、川の向うが間違ひなく米軍の占領地・南鮮側であるか道案内と偵察に行った。笠をかぶった九月の月明りの川面に底の浅い舟を滑らせて対岸に渡り、最寄りの駅に急いだ。駅の看板に「東豆川駅」とあるのを見たとときは、うれしくて涙が出た。皆の待っている場所に戻り、はやる気持ちを抑えながら夜になるのを待った。どこに鬼のようなソ連兵の銃口が狙いをつけているか分からない。これまでたくさんの同胞がこの川の中で殺されている。あと三十メートル、向う岸に向う舟底に身を伏せてひたすら全員の僥倖を神仏に祈った。南朝鮮側から眺めた国境の川は朝霧もやの中に大きくうねり、白い帯のようだった。

